
Double. **第三部**

Reliah

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double・第三部

【Nコード】

N3661H

【作者名】

Reliah

【あらすじ】

風を湛える村、ヴィントに住む青年キアは、魔物に襲われていた少女クラウデイスを助ける。「クライストに行つて、ある人に逢わなければならない」というクラウデイスなのだが……。今回はBL描写らしきものが全くないですので、カテゴリから外しました。第二部までの登場人物の出番はあんまりないかも……。

1・風を湛える村

風の村、ヴィント――

クライスト領の北東、レディエンス領との国境の手前に位置する山間の村である。

村には常に風が満ちているため、ヴィントの村は「風を湛える村」とも呼ばれていた。

「じゃあ、今日も見周りに行ってくるよ」

早朝、まだ日が昇り始めた時間に、赤い髪の少年――アムドウスキアスは両親に手を振る。

彼が身につけている簡素な軽鎧は、胸の部分に風を象徴するヴィントの自警団の紋章が描かれている。

今日の朝の見周りが彼の仕事なのだ。

「最近は魔物が増えているからね、気をつけるんだぞ」

随分と年老いた父親に肩を叩かれ、アムドウスキアスは小さく頷く。

「――大丈夫。それじゃあ、行ってくるよ」

足元に置いた剣を抱え、腰のベルトに固定する。準備は万端だ。

入り口の門を、自警団のメンバーが開く。軋む門をくぐり抜けな

がら、門番と軽く手を叩いた。

「気をつけるよ、キア」

愛称で呼ばれ、アムドウスキアス——キアは、微笑んで村の外へと歩き出した。

十数分、村の周りを歩いたろうか。

ヴィントの村は、周囲をぐるりと街道に囲まれている。村を通らずに、裏門——レイエンス側に向かう事も可能で、馬車などが良くこの道を通るためしっかりと舗装されているのが特徴だった。

が、近年不可思議な自然現象を起こすレイエンス領から魔物が侵入してくるなど、ここ最近の周辺の治安はあまりよろしいものではない。

自警団自体は元からあったものの、ここ数年のヴィントの自警団は稼働率が高く、若い労働者が少ないために必然的にキアをはじめとする少年たちも駆り出されていた。

「今日は異常なし、かな。——珍しくあっち《レイエンス》の天気も良さそうだしな」

レイエンス——それは、ヴィントの村だけに限らず、国境付近にある集落ならば誰もが警戒する国だった。

神国レイエンス——その名前だけなら聞こえはとても良いが、

実際のところは知らぬ者はいない「混乱の国」である。

人ならざるもの——つまり人間とみなせない種族を悪しきものと、神に代わり殺害するという『神の代行』が、およそ数千年にもわたり受け継がれている宗教国家。

その「代行」は徹底的で、人間以外の種族が国内で見つかるものならば即刻抹消され、さらには近年、クライスト領でもその行為に及んでいる。

その行いのせいだろうか、ここ数十年以上レディエンスは天候状況が芳しくなく、大きな天災に見舞われることが多い。

「ま、たまにはあっちも天気が良くないと困るよな」

特に深い考えもなしに、キアは苦笑する。

ひとまずは裏門に設置されている自警団用の掲示板に、今日の警備状況を記入する。

これで今朝の仕事は終了だ。このまま帰って薪割りでもするか——

そう思った矢先。

「——きゃあああ！」

ありきたり、と言えはありきたりなもの、とてもそうは言っていられない悲鳴が遠くからこだまする。

弾かれるように振り向き、声の方向を確認する。レディエンスの国境に向かって伸びる街道——その先から、悲鳴は聞こえた。

元々正義感が強いのもあり、キアは悲鳴の聞こえた街道を走る。どのくらい走ったろうか、時間にしては十数秒——

唐突に、眼前に一人の少女が飛び出してくる。

「うわっ!?!」

「きゃっ!?!」

ぶつかりそうになって踏みとどまれば、少女はその拍子に地面に転んでしまう。助け起こそうと手を差し出そうとするも、それは激しい咆哮によって妨げられた。

「あ——」

振り返ればそこに、人間ほどの大きさの熊の形状をした魔物がいた。

2・レイエンスの少女

唸り声を上げてこちらを注視する熊の魔物——このあたりではそうそう見ないウールベアだろうか。

その姿を確認すると、キアは腰に下げていた剣を引き抜いた。

背後にいる少女が今どうしているかは見えないが、とにかくこのまま彼女と逃げても村まで来られてしまう。その時の被害を考えればここで倒してしまったほうが倍以上いいのである。

——勝てるかどうかは別として、だが。

「グルルアア……！」

よほど腹を空かせているのかもしれない、好戦的な唸り声を上げてウールベアが突進してくる。

それをぎりぎりでかわし、突進している後ろ足の部分に思いっきり足を引っ掛ける。

「ギャウツ！？」

魔物というのは単純で助かる。難なく倒れたウールベアの背に剣を突き立てると、横幅でも自分の倍はある巨体がびくりと痙攣した。——が、困ったことにこのウールベアという奴、心の蔵が三つあるとも言われているほどの耐久力を有している。この程度では、すぐに振り落されるのは必至だった。

すぐさま剣を抜いて飛びのけば、間一髪というべきだろう。怒り狂ったウールベアの鋭い爪が、それまでキアがいた場所で唸りを上げる。

あの爪に引き裂かれるのは流石に勘弁である。槍の穂先に加工されるほど鋭い上に、当たれば肉をこつそりえぐり取られる。その爪に体が触れないように暫し追いかけて続ければ、先に負傷していたウールベアの動きが遅くなっていく。

この流れ自体は、旅慣れた傭兵やそれなりに腕のたつ者ならば誰でも知っている。皮膚が厚く体力も満ち溢れているウールベアに対処するには、まず出来る限り大きな負傷をさせて怒らせ、逃げ回ればいいのである。

そろそろか——ウールベアがふらついてきたのを見計らい、キアは助走をつけて高く中空に跳ねる。

そのまま魔物の背後に着地し、うろたえるその背中へ剣を突き立てた——。

気絶していた少女を抱えて、キアは自宅のドアを蹴り破る。

「——母さん、手を貸してくれ」

入ってすぐのキッチンで水仕事をしていた母親に声をかけ、キアは腕の中の少女をソファに寝かせた。

「おや、まあ。どうしたんだい」

父親と同じく年老いた母親の質問に、キアは先ほどの事情を説明する。

怪我などは一切ないものの、ウールベアとの戦争の間に余程体力を消費していたらしい。少女の顔色はあまり良くなかった。

「おやおや、お医者もいない村なのに困ったものだね……。熱があるようだから、ベッドに連れて行っておやり。氷と、濡らしたタオルを用意してあげるよ」

一瞬だけ、母親の言葉に戸惑う。ベッドに、と言われて連れて行ける場所は、母親が父親が自分の部屋。まさか両親の部屋を使うわけにもいかなかったために、消去法として結局自分の部屋のベッドに寝かせるしかない――

一応、女の子なんですけど。良いんですかお母さん。

一瞬だけのその迷いを、母親の「さっさとおし！」という喝にかき消される。慌てて少女を抱き上げると、キアは複雑な思いで少女を自室に連れて行く。

起こさないよう、そつと軽い体を横たえる。改めてみれば、ほんの少し自分より押さないであろう彼女は相当な美少女である事が理解できる。

角度によつてはほんの少し緑にも見える、糸のように細く柔らかい金髪。そこに細やかな作りの整った輪郭が収まっている。肌の色は随分と白く、透き通るように繊細で。

ほんの少し見惚れていれば、部屋のドアがノックされた。慌ててベッドから離れてドアを開ければ、氷水の入った洗面器とタオルを持って母親が入ってきた。

「それにしても、キアが女の子を連れてくるなんてねえ」

「……母さん、ちょっとそういう言い方は違うんじゃないの」

開口一番、とんでもない事を言い出す母親に苦笑いを隠せない。
とはいえ両親の年齢を考えれば、彼らが自分にいい結婚相手を探したくなるのも理解できなくはない。

……先ほどの発言は少々、唐突すぎるものはあるが。

「かわいい子だけれど、神官さんかしらね。多分、レディエンスの方の宗派でしょうね」

「……レディエンスか」

少女の額に絞ったタオルをのせ、母親が呟く。
確かに、着ている服は僧服に類似したものだ、クライスト側ではあまり見ない衣装だ。

が、レディエンスという単語だけで人間の印象すらも左右されてしまつのに悲しいものを覚える。

ほぼ会話もしていなかった彼女は、一体どんな人物だろう――

願わくば、優しい子であることをキアは願った。

3・クラウデイス

目がさめれば、知らない天井、知らない部屋。

いつの間に意識を失っていたのか——それすら思い出す前に、少女はゆっくりと起き上がった。

ぼとりと、額から何かが落ちる。まだ冷たい、濡れたタオル。

見渡せばそこは、どこかの民家らしい。一瞬ほっとした後、ベッドの傍にある窓から外を見た。

「あ……、あの人は」

窓から見えた光景に、少女は思わず声を上げる。

ほんの少しくすんだ緋色の髪の、少し自分より年上のように見える少年。

その姿を見て、少女は意識を失う前に彼に会っている事を思い出した。

——熊に襲われていた自分の前に現れた少年——

彼がそこにいるという事は、自分は助かったという事なのだろう。恐らく、ここはあの少年の家——

そこまで情報を整理すると、窓の外で薪割りに勤しんでいた少年

が顔を上げる。

金色の瞳と、視線が交わる。

ひと時の間を置いた後、少年はほんの少し安心したような表情をして、持っていた斧を片付けた。

「ちよつと待ってて」というような仕草の後、視界から彼の姿が消える。

ほぼ同時に、どこかでドアの開く音——恐らく、玄関なのだろう。程なくして、部屋のドアをノックされ、ゆっくり開かれた。

「——気がついたんだ」

まだ声変わりを果たしていないのか、見た目よりはやや高い声。ベッドから降りようとすると、少年は「いいよ」と少女を制止した。

「あの、助けてくれた……んですね」

仕方なくベッドに座り込んだまま、少女は目の前の相手におずおずと質問する。

少年は面食らった様子で慌てながら、「そうなると思う……」と頭を掻いた。

「正直、ウールベアを村に入れたら危なかったから、無我夢中で戦ってたんだけど……そしたら、君は気絶してるし。」

あ、ここは俺の家だよ。勝手に連れてきてごめんな」

やや落ち着きのない様子だが、少年は至極好意的に話をする。良
い人でよかった——安堵して、少女は漸く微笑んだ。

「……ありがとうございます。ほんとうに、助かりました」
「……あ、うん。どういたしまして……」

何故か少し照れた様子で視線をそらし、少年は苦笑する。
その少年の名を呼ぼうとして、少女はまだ互いに名乗っていない
事に気がついた。

「あ、えっと……わたし、クラウドデイス。クラウドデイス・シンフォ
ニア」

「あ——ごめん、名乗ってなかったよな。俺はアムドウスキアス。
アムドウスキアス・グラーニア——長いからキアでいいよ」

互いに自己紹介を済ませれば、開け放たれたままのドアがノック
される。次いで、こほんというわざとらしい咳の音。

ドアの前を覗きこめば、年老いた女性がそこに立っていた。キア
の家族らしいのは間違いないだろう。

「あ——母さん、いつからいたの？」

「お前がバタバタ家に入ってくるところから見てたわ。ええっと、
クラウドデイスちゃん、ね？具合はどうかしら」

見た目でいえばおばあちゃんともいえるその女性に手を握られ、
クラウドデイスは一瞬面喰らう。キアの母——にしては、少々高齢に
思えた。

「あ……大丈夫、です。多分……」

「そう、それならよかったわね。……おや？」

きゅうつ、と、何処からともなく聞こえた音。

母親の反応と同時に、キアも一瞬面食らった表情をする。

瞬時にその音が自分の腹から鳴っていた事に気がつく、クラウドデイスは慌てて下腹部に手をあてた。

「おやおや、丁度ご飯時だからねえ。クラウドデイスちゃんの方もちゃんと作ってあるから、今日はうちでご飯をお食べ」

にこにこ微笑む彼女の後ろに控えていたキアが、「母さんの飯はけっこううまいぜ」と微笑む。

恥ずかしくも、和やかな雰囲気になんと笑みがこぼれた。

4・襲撃

「ここはもう、クライスト領なのですね」

食事が終わって談笑していると、クラウデイスがそんな質問を投げる。

自分のいる場所の事が気になったらしい。——必死に逃げて来たんだろうから、そりゃあそうだろうな——思いながら、キアは「そうだよ」と頷いた。

「正確には、クライスト領とレディエンス領の国境近く。クライスト側には間違いないよ」

丁度よく母親が地図を持ってきて、キアは現在のヴィントの村の位置を指で示す。

「——こっちに行くとネクロミリア。クライストは、ここだな」

地図の上を軽く指でなぞって説明すると、クラウデイスは小さく頷いて、クライストは遠いんですね、と。

確かに、どちらかというと北側の端にあるこの村に対して、クライストは真逆の南側だ。辿り着くには、領土の端から端を渡らないとならない。

「もしかして、クライストに向かってるのか？」

「……はい。どうしても、逢わないとならない人がいるんです。大

事なものを、渡さないといけないんです」

俯いて、クラウドイスは目を伏せる。何かを決心しているような表情は、それでもまだ疲れを感じさせる。

「——そっか。でも、今日は休んで行きなよ。まだ随分疲れてるみたいだし」

「え……？でも……」

驚いた様子で顔を上げるクラウドイスに、キアは暗くなり始めている窓の外を指さす。

「このあたりはもう、今から外に出るには物騒だよ。狼もいるし、朝方君を襲ったような魔物だって多分まだまだいる。

それに、ここからは馬車も通ってないんだ、ネクロミリアまでちゃんと体力を温存しないと、とてもじゃないけどクライストまではたどりつけない」

流石にそこまで言えば、彼女も冷静にならざるを得ないらしい。また少し俯いて、クラウドイスは視線を迷わせた。

「ご迷惑では——そんな目をしている。

「まあ、まあ。せつかくのお客様なんだ。たまには賑やかでないとつまらないさ。それと、お嬢さんのその服はクライストじゃ悪目立ちするだろうねえ」

恐らく深く考えずに喋り出した父親が、腕を組んでクラウドイスを見る。と、思い出したように母親へ。

「そっだ、母さん。若いころの服を一着、差し上げたらどうだ。こ

の子もお前に似て美人なんだからきつと似合うぞ」

「おや、よく思いだしたね。ちょっとお待ちよ」

にこにこ勝手に話を進めるものである。暫し哑然とした後慌てて遠慮しだすクラウドイスに、キアは肩をすくめて「あきらめた方がいい」と呟いた。

この父と母に何を言っただって、聞くはずもない。

翌日、空は雲ひとつない快晴だった。遠くの空は黒ずんで、またレディエンスの天候が芳しくないようだ。

しかし、ヴィントの村には清々しい朝日が降り注ぎ、風がゆるやかに流れている。旅立ちにはちょうどいい朝だといえた。

「本当に、お世話になりました」

まだ着なれない服に身を包み、クラウドイスはぎこちなく微笑む。もう着る事はないからとキアの母が渡した服のおかげで、レディエンスの人間とはもう解らない。

「えっと……ここからネクロミリアに行けば、馬車を使い続けるって父さんが言ってたよ。できれば、商人ギルドが運営する乗合馬車に乗った方がいいって」

「わかりました。何から何まで、本当にありがとうございます」

簡単に道を教えれば、クラウドイスは村の入り口を見る。遠くに、

二つほどわかれ道があるのがうつすら見えた。

「——途中まで送るよ。ちょっと間違えたら遠回りになる場所がたくさんあるからさ」

苦笑して、キアは先に村の門を出る。本当はネクロミリアまで送ると何度も言ったが、迷惑はかけられないから——

そう言っ**て**強く断られてしまったのだ。

が、迷いやすい道を通**つて**しまふよりはいい。だから、途中まで——ということでお互い納得したのだ。

「さ、行こうか——」

微笑んで手を差し伸べるれば、クラウデイスはおずおずと腕を伸ばす。

互いに手を取り合**つた**その瞬間、明らかに異質な「風」が吹いた。

「——ようやく、見つけたぞ」

5 悲鳴の“アルト”

年のころは、キアより少し年上——大人と言っても差支えはない年齢だろうか。

白い髪、血のように赤い目を持つ青年が立っていた。

「やっと見つけたぞ。——こんな辺境とはいえクライストまで逃げ込むとは、運がいい女だ」

くつくつと笑いながら髪をかきあげる仕草は、貴族然としている。衣服を見るからに育ちは悪くなさそうだが、どこか——どす黒く歪んだ気配を全身から滲みだしていた。

「——知り合い？」

間違いなく違っただろうな、とは思ったが、傍らのクラウドデイスに尋ねる。が、返事のかわりにクラウドデイスは怯えた目でこちらを見る。

「逃げ、て」

漸く呟かれたその声はひどく細くて、目の前の男がどういう相手をか漠然と理解させる。

クラウドデイスの敵、には違いない。だが、そうならば必然的に自分たちの敵にもなりえるという事だろう。確かに、この男から滲み

だす殺気のようなものには容赦のないものを感じる。

「——彼女に何か？」

クラウドイスに詰め寄ろうとした男の前に、思わず立ちほだかる。赤く鋭い目が自分を嘲るように見降ろす。視線を向けられただけで、身のすくむ思いがした。

「だめ——逃げて！」

「——一般市民が口を出すなよ、死にたくなければな……！」

背中にかばったクラウドイスが、上着を引っ張った。そして、目の前の男の嘲るような囁き。その二つが全部耳に入りきる前に、体に強い衝撃が走る。

——目の前の男に突き飛ばされたと気がついたのは、地面に倒れこんでからだった。

「……ってっ、何を……！」

「キアさん！」

起き上がって相手を睨みつければ、向こうはそれを意にも解さない様子でクラウドイスに詰め寄った。腰に下げた重そうな剣に手をかけ、にやりと笑う姿に戦慄を覚える。

間違いなく、あの男はクラウドイスに殺意を持っている——どうして——？

その疑問が生まれた瞬間、また彼女と男の間に割って入っていた。

「——やめろっ……！」

「ち、邪魔するんじゃないぞ、屑が」

鋭い眼で睨みつけられる。足がすくむようなその気迫に、一瞬怖気づきそうになる。

が、ここで引いたら彼女がどうなるか……。そう思えば引く事は出来なかった。

「——なんで、彼女にそんなことするんだ」

「キアさん、お願いだから逃げて！その人は……っ！」

必死に足がすくまないように虚勢を張って怒鳴れば、目の前の男ではなくクラウデイスが答えようとする。

それをみなまで言わないうち、村の住人たちが騒ぎを聞きつけて家屋から飛び出してきた。

「何だ、喧嘩か！？」

「ち、面倒な……いつそ村ごとやっちまおうか」

鋭い目が、村人を睨む。それを見た瞬間、こいつは本当にヤバいと本能が警鐘を鳴らす。

「やめて！この村の人たちは関係ないでしょう……！？」

「お前さえ大人しく『浄化』されてくれれば、手は出さん。

——この餓鬼は邪魔だな」

一瞬——衝撃を受けた瞬間、それが相手の拳という事に気付く。

鳩尾を確実に狙ったその一撃は、明らかに殺すことを前提に打ち込まれたのだろう。

叫ぼうにも、息がつまって声にならない。そのままあえなく地面に倒れこみ、キアは深くせき込んだ。

「——キアーっ！」

村の仲間たちの叫び声。自分がこうも簡単にやられるとは思って

いなかったのだろう——逃げる、と視線だけ投げる。

「やめて、その人を殺さないで……っ！」

気がつけば、目の前に鋭い剣が突きつけられている。せき込みながら見上げれば、鋭く赤い血の瞳がこちらを見据えている。

クラウデイスの悲痛な叫びに、男は視線だけを動かして嘲笑する。悔しいが——この男に勝つことは不可能なんだろう。実力が違いすぎるのだ、なにも、かも。

「——お前が素直になればこいつの命までは取らないさ。さあ、どうするよ」

くつくつと、独特の笑み。キアの首元に剣を突き付けたまま、男はクラウデイスの方に向き直る。

「……わかりました。……そのかわり、彼と、村の人たちには、絶対に手を出さないください。」

「……よし、良い子だ」

諦めたような声をあざ笑うかのように、男はキアに向けた剣を引く。それを構え直し、俯いて目を伏せるクラウデイスに突きつけた。

「痛いのは一瞬だ。そう恐れるな」

——このままじゃ、あの子が——
どくん、と心臓がうずく。

——殺させてはいけない、と『誰か』が警鐘を鳴らす。

さあ、目を瞑れ——と、冷たい声が少女に投げられる。

「やめる——！！」

剣が降りあげられた瞬間、
うずいていた心臓がはじけるような錯
覚を覚えた。

6・壊乱の“アスタロト”

何が起こったのか――

ほんの一瞬そんな疑問を覚える。

まばゆい光が自分の体を包んでいて、一瞬、浮遊感を覚えた――
が、それはすぐに消滅し、光で妨げられていた視界が晴れる。

「な、んだと――！？」

信じられないと言いたげな声と、何かがどさりと倒れる音。

目の前に、今まで剣を振り上げ嘲笑していたはずの男が倒れている。

その光景を脳が認識するまでに酷く時間を要したと思う。状況を理解すると同時、背後からクラウドデイスが自分の袖を引いた。

「――今、のは……」

「何が、起こったのか……」

気がつけばそこに立っていた自分と同じく、クラウドデイスもまた、状況を飲み込めていないようだった。

何が起こったのか、あの光は何だったのか――それを考える前に、目の前の男が起き上がる。

「この……クソガキがあっ！」

落ちた剣を拾い、男は怒りを露わに襲いかかる。この距離では、

よけきれない――

思わず身構えた瞬間、空気が大きく振動する。

終わりだ――と目を伏せた瞬間、耳元で聞きなれない声が響いた。

「そこまでにしましょうね、アルト」

凜とした、だが妖艶な雰囲気を持つ女性の声。

痛みを感じないことと、その声に不審を抱いて顔を上げる。目の前に、蒼い髪の女性の後ろ姿があった。

「流石にクライスト領でこんな大乱闘されちゃ困るわ」

まったく困っていないような物言いで、その男――アルトの、剣を掴んでいる。何かの魔術だろうか、剣を掴んでいる部分だけ淡い光に包まれており、彼女の手が傷付いた様子は微塵もなかった。

「アスタロト！貴様、邪魔をする気か！？」

「……物事の優先順位が解っていないよね？代行する相手が間違ってる上に、目撃者の数も尋常じゃないわ。」

あちらでなら別に問題ないけれど、ここがどこか考えなさいな。」

厳しい口調でアルトを一喝すると、女性はちらりとキアを見る。

整った面立ちの、気品のありそうな女性――街で出会ったくらいなら、それで済んだだろう。やはり貴族然とした身なりの彼女は、ただならない気配を有していた。

「うるせえっ！俺は今このクソガキを殺してえんだ！」

「自称冷静なルシオン、が良く言うわね。もっと冷静におなりなさいな」

アスタロトと呼ばれた女性は、アルトの鋭い目に動じることなく微笑む。その微笑みのまま、不意にアルトの鳩尾に蹴りをくらわせた。

「ぐ……っ、き、さま……」

「……ごめんなさいね坊や、これ、今日の所はお詫びに連れて帰るわ」

あっさりと倒れてしまうアルトを呆然と見ながら、キアは目の前の女性を見上げる。

あれだけ強かったあの男が一瞬で――。

「でもねお穰ちゃん、今日のところは見逃しても――」

逃げられるってことはあり得ないからくれぐれも注意することね」

軽々とアルトを抱えて、アスタロトはごく自然に微笑む。その笑顔は、何も知らない人間が見れば一発で魅了されてしまうんだろう。だが、この場でのそれは恐怖を与えるに足る笑顔だった。

「それじゃあ、ごきげんよう。お騒がせしたわね」

やはり自然な笑顔のまま、アスタロトはアルトを抱えたまま平然と村の外へ消えていく。

漸く周りに集まって来た村人たちに質問をされても、答えられないような状況ではなかった。

「……怪我、してるわ。歩けます？」

「うん」

いつ付いたかわからない腕の傷に、指摘されてから気付く。
ひとまず家に戻って治療を——と勧めるクラウデイスに何も答える事が出来ず、キアはゆっくりと歩き出した。

7 代行者

きらきらと輝く、魔力の光。少女の手からあふれ出る淡い光が傷口に触れると、まるで時間が戻って行くかのように傷がふさがって行く。

初級の回復呪文とはいえ、その効果は絶大だった。完全に傷のふさがった腕を動かすと、違和感は全く感じられない。

「大丈夫……ですね」

ほっとした様子で、クラウドデイスが腕を下ろす。心配そうに見ていたキアの母親が、ありがとうねとクラウドデイスの頭をなでた。

その光景だけ見ていれば、まるでその二人は親子みたいだ。戸惑いながらも、クラウドデイスはほんの少し微笑む。

「——あいつら、一体なんだったんだ？」

悪いとは思ったが、キアは先程の男女——アルトと、アスタロトと名を呼びあっていた二人の事を問う。

少なくとも、知り合いでなくてもクラウドデイスはあの二人の正体を知っているようなそぶりだった。

「あの二人は……レディエンスの、代行者です」

——代行者——

聞いた事のない響きだが、それでも良いものではないと本能で理解する。

いったいどういうものか尋ねようとすると、意外なところから解答が帰ってくる。

「『神の代行』か……」

「父さん？知ってるのか？」

その場の全員が、恰幅のいい父の目を見る。いつも能天気なはずの父親の表情は、このときばかりは真剣だ。

「こんな田舎ではあまり耳にする者もないだろう。

代行者というのは、レイディエンスに古くから伝わる『神の代行』という習わしを遂行する人間のことだよ」

神の代行——どういうものかは知らないが、父の表情を見るに恐らく全く良いものではないのだろう。

「……神の代行というのは、たとえば不老種族や亜人のような、普通の人間ではない人たちを『浄化』すること。

平たく言えば、人殺しと言って差し支えないものです」

「……なんで、そんなこと？」

父親に次いでクラウドイスが告げた事実は、衝撃的——と言っても恐らく差支えないだろう。

聞いた瞬間に、なぜという疑問が口から飛び出していた。

「レイディエンスの宗教体制のせいだろう。

あの国では、純粋な人間以外は人として認めていないんだ。それ

と疑われた人間すら抹消するのがあの国のやり方だな。

なぜあの国が神の代行を励行しているかは、実際のところ解っていない。クライストとレディエンスの仲が悪いのも、一つはこれが原因とも言える」

ますます理解ができない。というよりも、理解する気にはなれない。

他と少し違うから、簡単に殺すなんて言う発想は普通ならあり得ないものだ。

「……エルフや亜人、不老種族やその混血、そう言った人たちは、殺害の対象なの。」

そして、そうであるかも知れないと疑われた普通の人間でも、代行者たちは容赦なく殺してしまうの」

「そんな、何も悪い事をしてないのに殺されるなんて——」

それが、レディエンスのやり方なのだ。

悲しげに頭を振り、クラウドイスは呟いた。彼女が一体どういう思いでそう言ったかは、推し量るべきことなのだろう——

「——ごめんなさい。貴方を巻き込んだようなものですよね。」

わたし、もう行きます……これ以上、皆さんに迷惑はかけられないもの」

寂しそうに微笑んで、クラウドイスはキアの横を通り抜ける。

この子を一人で行かせてはいけない——

なぜか、強くそう思った。

それを自覚する前に、クラウドイスの腕を掴む。驚いた様子で振り返る少女は、困惑の色を瞳にのせている。

「——待てよ。追手が来ないとも、限らないんだろ？」

さっきのあの女、逃げられないって」

「……大丈夫です、少なくとも、あんな強い人たちがこちらに来るのはごく稀なことです。

普通はレイディエンスから出る報奨金目当ての盗賊や賞金稼ぎにしか出会いませんから」

危険なことには変わりがない。それに、人里を離れてしまえば魔物の脅威だってあり得るのだ。

少女の腕を握ったまま、キアははっきりと意思を持った声で囁いた。

「それでも、君ひとりじゃ危険だよ。

——俺も一緒に、クライストに行く」

8・クライストへ

蒼い瞳が、大きく見開かれる。

絶対だめと頭を振る目の前の少女に、キアは手を差し伸べる。

「——今度あのアルトって奴が出てきたら、追いついてやるんだ。それに、さっきのあの光のことも、クライストまで行けば何かわかるかもしれないだろ。だったら一緒に行った方がいい」

にこりと微笑み、ほら、と手をもう一度差し出す。

その手を取る事はなく、クラウデイスは深く俯いて背を向ける。

「——わたしが、逢いたい人——その人に、言えば……」

権威のある魔術師や研究者に会わせてくれるかもしれない。

あの光は、多分……魔術的なものだと思います。とても強い魔力を感じましたから」

静かに、そしてはつきりと少女は呟いた。それは、つまり同行してもいいという事なのだろう。

軽く肩を叩けば、クラウデイスは苦笑して顔を上げる。

「ダメって言っても、今の貴方を止めるのは無理なんでしょうね」

困ったような表情で、しかし嫌ではないのだろう。よろしく願います、そう言って少女は頭を下げた。

「じゃあ、行ってくる」

玄関で並ぶ両親に微笑みかけ、キアは何かの本で読んだ敬礼を真似る。向きが違うぞ、等と父親に直される——こんな些細な事も、今日でしばらくお預けだ。

元々最初から、彼女をネクロミリアまでは送ろうとしていたのだ。予定が狂ってしまったが、これはこれで良いだろう。

「二人とも、いつでも戻ってきなさいね。美味しいご飯ならいっぱい作ってあげるわ」

「……はい。おばさまの料理、また食べられるのを楽しみにしています」

すっかりと打ち解けた母親とクラウドイスを見ながら、父親は嬉しそうに目を細める。

「いつそうちの娘になってもかまわんよ」なんて言い出すから困りものだが、そんな冗談も暫くは聞く事がない。

「出来るだけ早く戻るよ。……まあ、片道一週間の遠い道のりだけだよ」

「急がば回れだぞ、そう焦らなくてもいいだろう」

そうだね、なんて相槌を打ちながら、いつものように笑って、行ってきますを言う。

その後しばらく戻る事はない。しかしこの両親なら、戻って来た時には「お帰り、早かったねえ」なんて言いそうだ。

笑顔で手を振る両親に背を向け、キアは目の前の少女に手を差し出す。

「行こう。ネクロミリアまでは、半日と少し歩けば着くはずだから」
「ええ。——ほんとに、大丈夫ですか？」

大丈夫——笑顔で頷いて、手を握る。漸く嬉しそうに微笑んで、少女は隣に並んで歩き始める。
と——

「——おや、もしかしてネクロミリアへ向かわれるのですか？」

不意に、村の門にちょうど現れた幼い少年が話しかけてくる。
やたらに丁寧な物言いと、目深にかぶられた外套とフード——手に持っている楽器から、恐らく吟遊詩人の類と推察できる。
年のころは恐らく、十五、六ほどだろうか。フードの下からようやく見える口元は、にこりと微笑みの形状を保っている。

「そうだけど——どうかしたのか？」

「いえ……今、普通の道を通ろうにも……多分数日、ひよっとすると一週間はかかってしまうので」

どういう事だろう——と聞けば、少年はこの先の川がレディエンス側の天候悪化の影響で氾濫し、橋が流されてしまったという。
結局修繕に一週間はかかるという話で、少年は少々危険な近道を通って来たのだとか。

「近道——って、反対側にあるあの古い洞窟の事か？」

「ええ。ネクロミリアの古い廃坑につながっているのです。お勧め

はできませんが、急いでいるならあちらに向かうべきかとも思いますが」

笑顔を保ったままの少年にありがとう、と告げ、キアは不安そうな表情のクラウドイスにどうする？と尋ねた。

「——キアさんが負担になるかもしれないけれど、一週間も待つのは……」

年ごとの、かわいい少女である。間違いなく魔物の巣窟であろう場所に足を踏み入れるのは、流石に怖いのだろう。

「俺は大丈夫。……クラウドイスは回復、しっかりやってくれよ」
「……はい」

どの道、そこを通るしかないわけである。となれば悩んでいる必要はない。

「もしかかったら、これをどうぞ。通り抜けるときに使用した残りです」

まだその場にいた少年が、懐から棒のようなもの——簡易用の炎を使用しない松明を差し出す。

恐らくこれからレイディエンスへ向かうのだろう少年には不要なのだろう。ありがたくそれを貰い、再度礼を言った。

9・刺客

「暗いな」

ぼそりと呟いて、手に松明を掲げる。それでもぼんやりとしか視界を確保できないその洞窟は、先程話を聞いた限りではネクロミリアの方向につながっているというのだが。

「それにしても、タイミングが悪いわ。……橋がないなんて」

はぐれないようにとキアの服の裾を掴み、クラウドイスがあたりを見回す。

数十分歩いたものの、何処がどうなっているのかすらわからない。一本道なのが救いだ。

話ではこの先に廃校へ繋がる穴があるらしいが、この分では暗すぎてどこからが廃坑なのか解らないなんて事もありえそうだ。

——が、そんな事はなかったらしい。

「あ——。明るいわ」

真つ暗な洞窟の奥、クラウドイスが示す方向にほのかな光が差し込む場所が見えた。

もしかすると、そこが廃坑だろうか——

それにしたって、明るいのはなぜなのか。その疑問はすぐに解決した。

光の差し込む、洞窟に開いた穴の中に踏み込めば、淡く光る石がそこらじゅうに散らばっている。拾ってみれば、小石大の大きさから、壁に埋まっているものまで、どれも橙色の輝きを放っていた。

「——きれい」

その感想を否定する人間は恐らくいない。まるで炎を灯したように照らされる廃坑内は、松明がいらなほどに明るかった。

先程の少年が、松明の残りをくれたのはそういう事だろう。この廃坑を通る時にはそんなものを使う必要はない。

「——でも、ここって廃坑だよな？こんなきれいに光る石があるのに、何でもう放っておかれてるんだ？」

感動した後は、疑問がわき出てくる。これだけ明るく照らす事が出来るなら、使い道もあるはずだろうに——

「その石はひとたびこの坑道から出してしまえば、光を失ってしまふんですよ」

不意に、誰かの声が響く。クラウデイスではない——やや中性的で、穏やかな声。

あたりを見回せば、廃坑の向こう側——恐らく、ネクロミリア側から、自分とそう歳の離れていない少年が歩いてくる。

腰まであるエメラルドの髪と、翡翠の瞳。一見少女とも見える端正な面立ちに、細身の眼鏡。

やや知性的に見えるのは、眼鏡だけでなく学者のようないでたちのせいだろうか。その少年はにこりと微笑むと、足元の光る小石を一つ手に取った。

「これは光の石といって、ほんの少し魔力を内包している石です。」

互いの光で共鳴して強く輝くのですが、ひとたび日の光を浴びるとその魔力が抜け落ちてしまふんです。

魔術が発達しておらず夜が暗かった時代は、よく貴族の嗜好品として珍重されておりました。今では輸送が面倒なので商業的な価値はないものなんです」

説明を終えると、少年は石を丁寧に元あった場所へ置き直す。捨て置いても良さそうなものだが、そういう事をするタイプではないのだろう。

「詳しいんだな、あんた」

「ええ、一応学者の端くれですからね。ところで、あなた方はネクロミリアへ？」

笑顔を湛えたままの少年に、キアもクラウデイスもゆっくり頷いた。恐らく反対側へ歩みを進めている少年の向かう先は、レディエンスなのだろう。

「なるほど。では、まっすぐ進んで、角は曲がらないで行くと良いですよ。一本道でたどり着けます」

「わかった。ありがとう」

旅人同士の情報交換、のようなものだろう。村の場所でも教えてやろうかと思っていると、背後から新たに気配がやってくる。

「——ほんとに廃坑がありやがるぜ」

「なんだ、この石？」

洞窟につながる穴から入って来たのは、お世辞にも上品とはいえないタイプの男たち。身なりを見るに、盗賊か賞金稼ぎか、そこいらのごろつきか——そんないでたちである。

揃って同じような衣服を身につけているところから、どこかに所属しているようにも見えるが――

「あ――」

男たちの軽鎧につけられた紋章を見て、クラウドデイスが後退する。孔雀を模した紋章は、初めて会った時に彼女が身につけていた神官服にも刺繍されていた。

その男たちがこちらに気付くのはそう遅くなかった。同時に、そのうちの一人があつと声を上げる。

「あの女、手配書の娘だ！」

手配書――良い響きではないが、クラウドデイスが追われる理由なんて一つに決まっている。

「代行者か！」

剣を抜こうとして構えると、既に男たちはそれぞれ獲物を抜いている。逃げるような隙は流石になさそうだ――

「手を貸しましょう」

穏やかな声が、背後から響く。どこから出したのか細身の剣を片手に、眼鏡の少年が横に並んだ。

「――巻き込むわけには……」

「いえいえ、大丈夫ですよ。どうせ関係ないと言い切れませんか
らね」

至極冷静な彼が、それほど剣を使えるとは正直思えない。しかし、この余裕は何だろう。

「しかしその前に一つよろしいですか。代行者のみなさん、こちらはクライストですよ？代行する場所、間違ってますか――？」

「るせえな、陛下の勅令なんだよ！その女を逃がすわけには……もがっ」

「馬鹿！のせられんな！」

……なんという単純さだろうか。普通に一般人が聞いてもヤバい事を平気でしゃべってしまう代行者に、少年の方も少し苦笑いしている。

「では、引くつもりはないと——？」

気を取り直したようで、少年は笑顔のままで尋ねる。当たり前だと怒声交じりに叫ぶ男たちに、少年は「わかりました」と微笑んだ。

10・騎士団の少年

「——では、容赦しませんよ」

ニコニコと微笑んだまま、少年は剣を構える。敵からすればほんの少し不気味な事だろうが、幼い容姿のせいか迫力というものはない。

一回り以上も大きな体の男が、薄ら笑いながら斧を振り上げる。少年は動かない——ように見えた。

「乱暴者は嫌われますよ」

冷静な声。その呟きの後、少年は斧の軌道を避けるように飛びのき、次いで素早い身のこなしで男の背後に回り込む。

素早い——そう思った時には、少年のほんの少しの動作だけで男が倒れ伏していた。

「——」

その場がしんと静まり返る。倒れている代行者の背には、ほんの少しの傷しか付いていない。

が、その手脚はほんの少し痙攣し、動く事が出来ないどころか気絶しているらしい——

「さて、全員倒れる前に一度お帰りいただいた方がいいと思いますよ。あ、彼の命に別状はありませんからご心配なく」

笑みを浮かべたまま、少年は手にしている剣を鞘に納める。彼と

しては戦うつつもりはこれ以上ないらしい。

「もう一度言いますが、ここはクライスト領です。これ以上神の代行を遂行する意思があるのでしたら、貴方達全員を軍に拘束する事になります。」

——こちらでの代行は、死罪ということをお忘れなく」

死罪——

重く囁かれた言葉に、残された男たちが怖気づく。目の前の少年が、たったの一太刀で一回り以上もある男を倒したのだ。得体が知れない——そう思ったのだろう。

「お、覚えてるよ……！」

悪役にはおなじみの台詞を吐くと、男たちは倒れた仲間を抱えて元きた方向へ戻って行く。

啞然としたままそれを見送ると、やはり笑顔のままの少年が戻って来た。

> i 1 2 5 2 — 2 1 2 <

「災難ですね、代行者に狙われるなんて」

「あ……、ありがとうございます」

やはりクラウディスも啞然としていらしい。戦闘には無縁そうな少年が、不可解すぎるほどに鮮やかに敵をのしてしまう姿は驚くどころの事ではないのだろう。

「今の、一体どうやったんだ？あんな浅い傷で……」

「あ、やっぱり気になりますよね」

にここに、にここに。やはり絶やされない笑顔で、少年はもう一度剣を抜く。

「こつそり、刀身に弱めの雷を仕込んでいたんです。これならちよつと斬り付けるだけで良いので、力の弱い僕にでもああいう事が出来るんですよ」

少年が小さく言霊を唱えれば、剣がぱちぱちと雷光を纏う。薄らとしか見えないそれは、確かにハツタリにはもってこいなのだろう。威力を間違えれば、余裕でハツタリ以上の効果を発揮しそうな気はするが。

「……なるほど。でも、剣もだいぶ慣れてるんだな」

「まあ……それが仕事ですし。あ、申し遅れました。『私』はクライスト騎士団所属のクレアと申します」

思い出したかのように、少年——クレアはかしこまった挨拶をする。騎士団の人間がなぜこんな場所に、とも思ったが、何か用事でもあるのだろう。

「——騎士団の……もしかして、ルカという方をご存じですか？騎士団に所属していたと思うのですが」

ルカ——

その名前を聞いた瞬間、クレアはほんの少し目を見開く。初めて、彼の笑顔が消えた。

「——知っております」

硬い口調で呟くところから、もしかすると触れてはいけない話題だったのかもしれないし、相当に重要な人物なのかもしれない。

そういえば、クラウドイスは誰かに、何かを渡さなければならな
いと言っていた。恐らくそれが、そのルカという人物なのだろう。

「本当ですか!？」

「……ええ。しかし、なぜ彼の事を？」

訝るように、クレアは眉を潜める。クラウドイスは一瞬迷ったよ
うな表情を見せ、懷から何かを出して見せた。

「——彼に、これを渡さなければならぬのです。同じものを、あ
の方も持っていたはず」

赤く光るペンダント——それは、中に何かを納める事が出来るも
のようだ。

水晶の形をとった宝石の部分にほんの少し亀裂があり、装飾を施
されたフレームで周囲を保護されている。

「お願いします、彼に逢わせてくれませんか。私がこれを
持っていては、いずれ代行者たちに奪われてしまいます」

必死にクレアに頭を下げ、クラウドイスは懇願する。代行者とそ
のペンダント、そしてルカという人間にいったいどういう関係があ
るのだろうか——

思いながらも、キアはクラウドイスの肩を叩く。

「——俺からもお願いします」

一緒に頭を下げ、少し困った表情のクレアを見る。もしかする

と、ルカという人物はそれほど重要な人物なのだろうか。

が、旅の目的は最終的にそのルカという人物なのだ。あの時自分の体からあふれ出した光の正体を、調べてくれるかもしれない――。

しばし考える様子を見せ、クレアは顔を上げた。

「……解りました。ですが、ルカは現在、騎士団に所属していないのです。」

直接僕が案内する事はできませんし、少し面倒な手順を踏んでもらう事になると思います」

「――構いません、それでも。逢えるなら……」

祈るように頭を下げるクラウドに、クレアは「頭を上げてください」と申し訳なさそうに囁く。

「クライストに着いたら、中央広場で鳩に餌を与えている商人が居るはずです。――その人に、ルカの事を訊ねてください。僕の名前を出せば、会わせてくれるはずです」

ひっそりと囁くように告げ、クレアはまた元の笑顔を浮かべた。

11・商業都市ネクロミリア

廃坑を抜けると、大きな街が遠くに見える。やや高台にあるらしい廃坑の出入り口は、作業台などが残る開けた場所にあった。

ネクロミリアは恐らく、ここから見える都市の事だろう。話には聞いていたが、随分と大きな街だ。

「——それにしても、目的の人の住んでる場所も知らなかったのか？」

「……、子供のころ、逢った事があるだけだから」

「ごめんなさいと俯くクラウドイスに、キアは慌てていいよと両手を振る。深く聞いていない自分も悪いのだから。」

「このペンダントの中には、ある危険なものの一部が封印されているんです。……そのうちの 하나가、先日レイエンスの王族の手に渡ってしまっ」

「だから、非力な自分が持っているべきではないとクライストまでやって来た——」

「そう言っ、クラウドイスはペンダントをしまっ。」

「……手配書ってのは？」

「レイエンスが、代行対象を探しやすくするために発行しているんです。わたしの手配書は、随分早く出回ったみたい」

なるほど、だから追っ手ともいえるような者たちがすぐに現れたというわけか——納得して、キアはそれ以上質問するのをやめる。遠くにあるネクロミリアを見つめ、この距離ならば数時間でたどり着けるかもしれないと見当をつける。

危険ながらも「近道」というのは間違いなかったようだ。——それなりに魔物も現れたが。

「……行こう。日が暮れないうちにネクロミリアに行けるはずだよ」
「……はい」

道標の看板を見つけ出して方向を確認すると、二人はそのまま山の麓へと歩き出した。

目まぐるしい人、人、人——

その人混みをゆっくりと通って行く荷馬車、ちらほらと見かける同じローブを着た人々。

商業都市ネクロミリア——

商業においては恐らく世界一と言っても間違いのないであろうその街は、クライストやレイエンスをはじめとした様々な国々に物資を運ぶ流通の要として存在していた。その流通ルートは遠い東の大陸にまで及ぶと言われており、まさに世界一の名にふさわしい範囲である。

ネクロミリアに拠点を置く商人ギルドは一つの国に匹敵する財力

を有しており、いふなればネクロミリアという街が一つの機関のような状態になっている。

街の至る所に居る同じローブを着ている人間は全員、商人ギルドに所属した商人である。

そのローブを着ていれば商品には一定の品質が保証されている。所謂ブランドのようなものだった。

勿論このギルドに所属していない商人も多数いるが、最終的に真つ当な商売をしたい者たちはここに行きつくのである。

「——話には聞いていたけれど、本当に商人が多いんですね」

「まあ、どこ行っても商売人の街だからな。——とりあえず、馬車を探そうか？」

街の様子に圧倒されながらも、ひとまずはと次の行動を提案する。

と――

「待てっ！どろばー！」

「ち、違うつてえっ！！」

間近で聞こえた怒声と悲鳴。それに振り向けば、目の前に小柄な少女が飛び出してきて――

「う、うわぁ！？」

「ぎゃうっ！？」

避ける間もなく、キアと衝突する。勿論地面に倒れこむわけだが、さらに重力に逆らえずに落下した少女にあえなく下敷きにされる。

「だ、大丈夫ですか！？」

慌てて、クラウドイスが少女を助け起こす。あうっ、とかぎゅう、とか言いながらくらくらとする少女の、年のころは十五ほどだろうか。

「いつてて……」

「おお、良く捕まえてくれた！ほら、盗んだものを出すんだ——」

程なく息を切らして走って来た男が、まだ目を回している少女を汲み伏せようと腕を掴む。

「はっ！？だ、だから違——」
むに。

暴れた少女を押さえようとした男の手が、その胸元に触れて硬直した。

その瞬間。

「ぎゃああつどこ触ってんじゃこのド変態——！」

哀れ、乙女の胸を掴んでしまった罪により、男は手痛い反撃を受けることとなった。

12・忍びの少女

「まったく、もう！人を泥棒扱いした挙句、胸を触る、なんて、最低、でござる、よ！」

がつがつ、もぐもぐ。

大量に並べられた料理を次から次に消費しながら、少女が先程の男の文句を垂れる。

その向かいの席でジュースとお茶を啜りながら、キアとクラウデイスは苦笑いをこぼした。

「だいたい、あんな宝石盗むなら、食べ物盗むでござる、よ！」

食べながら切れ切れに喋る彼女に、二人だけでなく周囲の他の客も圧倒されている。

その場の誰もが正直に思った事だろう。

「どこにその量が収まるんだ？」と――。

結局、泥棒と疑われていた少女は盗品どころか何も持つておらず、さらにその盗品を持って逃走した子供が見つかったことで解放された。

その前に警備官たちにこっぴどく叱られるほど、追いかけてきた男をのしてしまったのだが。

ソカと名乗った黒髪の少女は、よくよく見れば異国――恐らく名も知らない東の大陸の衣服を身につけている。

独特な喋り口調もそのせいかと思うが、そもそもこの少女自体少し他とズレているようだ。

「ふーっ！生き返ったでござる！拙者、この恩は一生忘れないでござるよお！」

嬉しそうにお腹をさすり、少女は幸せそうに微笑む。

聞くところによると彼女は、東の大陸にある「出雲の国」という場所から知り合いを訊ねにやって来たらしい。

「どうも船を間違えてしまって、れでいえんす、という良く解らない国に来てしまったのでござる。

それで用意していた路銀が尽きてしまって、さらに盗人と間違えられて、本当に死ぬかと思ったでござるよ」

涙ながらに語るソカに、クラウドイスがそうだったの、小さいのに偉いわね——なんて頭を撫でる。

が、その瞬間ソカの瞳がさらに潤んだ。

「し、失礼な！拙者、花の１７歳でござるよ！？」

……………。

『ええっ！？』

ほとんど同時、と言ってもいいだろう。同じリアクションで、キアとクラウドイスは目を丸くして叫ぶ。

どう見ても十五くらいにしか見えない彼女だが——

「ほ、ほんとーに、わたしと一つしか変わらないの？」

何故か慌てた様子で、クラウドデイスが尋ねる。涙目で頷くソカに、もう一度絶句した。

「そ、そりゃあ、周りの同じ年頃の娘よりも幼く見えると国では評判だったたりもするでござるが……じゃない、とにかく、子供じゃないでござるう……」

「ご、ごめんごめん。あ、というか君は今からどうするんだ？」
くすくすんと泣き出すソカを宥めるように話題を変える。どうやらソカも存外切り替えは早いらしい、はつとした表情で顔を上げた。

「……くらいすとまでは、どれくらいかかるでござるか？」

どうやら、彼女の知り合いというのはクライストにいるらしい。道理で路銀が尽きるわけである。

「一週間は、かかるよな。それも、馬車でだから……徒歩じゃ……半月か、それ以上？」

恐る恐る呟けば、ソカは漆黒の瞳を潤ませて頭を抱える。無一文では馬車に乗れない。しかし、歩いて行くにも遠すぎる上に野宿も避けては通れない。

「……キアさん、あの……」

「……多分なんて言いたいかは解るけど、なに？」

頭を抱えるソカを憐れんだ目で見るクラウドデイスが、何を言いたいかはよくわかる。

それでもあえて質問すれば、予想通りの回答が帰って来た。

「——目的地も、一緒ですし……彼女も連れて行きませんか？」

13・錬金術師

所は変わり、霧深い国レイエンス――

その人気の少ない街並みをゆつくりと歩きながら、クレアは手にした地図を眺める。

国境から比較的遠くにあるクライストとは違い、レイエンスは国境沿いの町から馬車で約一時間の場所にある。

それよりも北に行ってしまうと、レイエンス自身が滅ぼしてきた国々の廃墟が累々と並び、人里があつたとしても旅人が気軽に立ち入れるほど生易しい環境ではない。

大国と言っても、国の性質のためか広い領土に存在する国々はごく少ないものだった。

「このあたりか――それにしても、噂通り物々しい国だね」

溜息を吐いて、ほとんど歩く者のいない道を歩く。大きな屋敷の立ち並ぶ通りはほぼ煉瓦や切り出された石で舗装されており、クライストとは正反対の無機質な感じを覚える。

街路樹はまだ春の終わりだというのにその葉を枯らしていて、まだレイエンスが「冬」であることを示していた。

とはいえレイエンスとクライストでこんなにも季節の差が大きいのは、ここ数十年の事らしい。

原因は良く解っていないが、何かが起こっている――そんな不安を、レイエンスの住人だけでなく近隣も感じ取っているようだった。

「――闊歩するは代行者と旅人ばかり、か」

何度かすれ違った兵士――代行者らしき者や、商人ギルドのローブを着た旅人達。それ以外を街で見かける事はほとんどないようで、先程漸く犬と戯れる少年を見かけた程度である。

ほとんど鎖国状態だな――等と思いながら、クレアはある屋敷の前で立ち止まる。

「この家かな。――サンジェルマン・ロジェ伯爵、か」

表札に書かれている家主の名前を確認すると、目的の人物であると確信する。そのまま、扉を叩いた。

「――どなたですか？」

開かないままの扉の奥から、落ち着いた声が帰ってくる。

恐らく、家主なのだろう――手にしている情報では、使用人の類などは殆ど居ないと聞いている。

「クライストの者です。以前、部下がそちらに見えたと存じますが」
声を潜めて囁けば、しばしの沈黙の後ドアが開く。

出てきたのは、亜麻色の髪の――少年とも、青年ともつかない人物。

やや背は高いものの、自分に負けず劣らずの細身の彼は、前髪でその両目をほぼ隠していた。

> i 1 2 5 3 — 2 1 2 <

「――サンジェルマン・ロジェ伯爵？」

「……ええ、貴方は？」

出来るだけ声を潜めて尋ねれば、青年——サンジェルマンは小さく頷く。次いで投げかけられた質問に、クレアは懷から鳩の紋章が描かれた手帳を出して見せた。

「クライスト騎士団所属師団長、クレア・クライス・ライアと申します。

……お尋ねしたいことがあるのですが」

やはり声を潜めたままに尋ねれば、サンジェルマンはほんの少し考え込むように俯いてドアを大きく開く。

そのまま背を向けて屋敷の奥に歩き出す彼をじっと見つめる。

再度振り返ると、サンジェルマンは無表情のままこちらに手を差し出した。

「……どうぞ、お入りください。大した話は出来ないと思いますが」

出された紅茶には手をつけず、クレアは小さく溜息を吐く。

現在のレイエンスの幹部構成に、代行者たちの現状——恐らく伯爵という立場のためか、サンジェルマンは嫌でもそう言った情報を耳にするのだろう。

大したことではないと言いつつも、会話の後に残ったメモはなかなかの量になった。

国内でそれだけの事を話すのだ、恐らく彼もそろそろこの国から

出ていく腹積もりなのだろう。

知っている事はすべて話した——そう言っ、紅茶を啜る。髪の奥に隠された瞳が見える事はなく、彼が何を考えているかはよく分からない。

「ありがとうございます。……それと、個人的な質問をしてもよろしいでしょうか」

礼を言った後、クレアはふと尋ねてみる。彼は錬金術師だと聞いている。だったら、もしかすれば自分の呪いを解くような錬金術も、知っているかもしれない——

未だに自分を束縛している、災いと不死の呪い。それを解除するのは、クレアにとって一番の目的でもあった。

が、錬金術という単語を出した瞬間、サンジェルマンは首を横に振る。

「……すみませんが、その話は、やめていただけないだろうか。もう、本を見る気にもなれないのです」

——明らかな、拒絶。恐らく何か忌まわしい思い出でもあるのだろうそれを、無理に抉り出すような趣味はクレアにはない。

早々にあきらめて「失礼しました」と頭を下げれば、サンジェルマンはそれ以上気を悪くした様子はないらしい。いいですよ、とほんの少し寂しげな声が帰って来た。

「それよりも、早く帰ったほうがいいでしょう。

この国ではちょっとした因縁や疑いがかかるだけで化物扱いされますからね。特に、私の屋敷から出てきたとなれば——」

「……ご忠告、恐れ入ります」

その後、彼はどうするつもりなんだろうか——思いながら、クレアは屋敷の外に向かう。

が、思った以上にサンジェルマンの予想は早く当たることとなったようだ。

「——貴様がサンジェルマン・ロジェだな？」

ドアを開けた瞬間、孔雀の紋章を掲げた兵士の剣が向けられた。

14・逃走

「――閉めてください!」

背後から、サンジェルマンの声。それに従ってドアを閉め、門を引っ掛ける。

が、兵士は確認できただけでも相当数が居た。窓などを割って入られるのも、時間の問題だろう。

「……ご丁寧にも、あなたと間違われてしまったようです」

「はあ、タイミングの悪い……。籠城しても無駄でしょうね。」

この屋敷、無駄に広いので窓を割ってどこからでも侵入できます」

肩をすくめて振り向けば、サンジェルマンは特に困ったそぶりもなく呟く。何となく、すべてを諦めているような印象を受けるが、だからと言って死にたいというわけではないのだろう。

どちらかというと余裕すら感じる態度である。

「余裕、ですね」

「いえ、特に死に対して恐怖も感じません。長いこと生き過ぎてしまいましたからねえ……。」

しかし、貴方はこのままでは困りますね。国に家族もいる事でしょうし」

家族、か――

そんなものはとうの昔に居やしない。が、今そんな事を言うのも野暮というものだ。

「……ご心配なく、正面からでも逃げ切れないことはありません。……ですが狙われていると解っている方を置いて逃げるというのも、私の美学に反しまして」
「要するに、一緒に逃げると？」

やはりサンジェルマンは逃げる気がなかったらしい。おどけるような仕草で返され、クレアはいつもの笑みを浮かべた。

「ええ。代行者に狙われた方の保護も、私の業務に入っておりますので」

それは国外であるレディエンスにおいては通用するものでもないだろう——そんな事も言われそうだが、どうやらサンジェルマンはそれすらどうでもいいらしい。

解りましたよと適当に返され、背を向けられる。すぐ傍にある細剣を取って、「行きましょう」とだけ言われた。

案内された地下室にあった抜け道から、坑道のような場所に出る。やはり光の石が散らばっているそこは、明かりを用意せずとも歩くことができそうだった。

「随分凝った抜け道ですね。この坑道は——？」
「祖父の遺産です。とはいえ、この坑道に抜け道が繋がったのは偶然の事です……」。

国境付近まで続いていきます。ここを通らない限り、追いつかれる事はほばないでしょう」

絶対とは言えませんが、と付け加え、サンジェルマンは歩き出す。そのあとに続き、数時間——無言で歩き続けた。

別段話す事は特にない。が、そろそろ沈黙も飽きてきたと思ったころ、遠くに光がさしている場所を見つけた。

「——出口です」

「思ったより、早いですね。——街道を介してないからでしょうか」

国境付近にあるという出口に思いのほか早く辿り着き、クレアは少しまぶしい光に目を細める。

外に出てみれば、そこは古びた廃坑のようだった。入口の殆どは苔に覆われ、蔓がカーテンを作っている。振り返れば、その奥に何があるかは解らない。

「なるほど、見つからないわけですね」

「恐らく街道からはけっこう外れているでしょうからね。こんな場所がばれたらうちは泥棒に入られ放題ですけれど」

珍しく——というほどの知り合いではないが——冗談を飛ばすサンジェルマンに、クレアは苦笑して「先を急ぎましょう」と呟く。追手が来ないとは限らない。恐らく、それなりの手配はされているのだろうし、ここは基本的にレディエンス領だ。少しの油断もしてはならない。

「ところで、聞き忘れていましたが……クライストで、陛下に会われるつもりはありませんか？」

「どうでもいいですよ。処遇はお任せします」

やはり彼はそれすらもどうでも良いようだった。苦笑した後頷くと、クレアはあたりを見渡す。

街道から随分離れているとはいえ、遠くが見渡せないわけでもない。だいたいの場所の見当をつけ、その場を離れて歩き出した。

—— 第三部 了 ——

あとがき

ことあるごとに話の切れ間がおかしい気がする Reliah です。
第三部こんな終わり方でよかったんだろかなんて思いつつ。

流石にそろそろ、前のお話読まなくても大丈夫！なんて書き方が苦しくなってきたところがあります。実力不足というか、構成力不足というか……

というわけで多分第四部はこっちを読んでから推奨にしておくことにします。ほんと、世話の焼ける作者でスイマセン。

前回のあとがきでクレアの登場が少ない事に全く触れてなかったためか、勿論彼の周囲での話なんだろうって思った方は本当にスイマセン。

後半でようやく出てきましたが、また第四部でも登場は少なめ、かもしれません。むしろまた新たに主人公が登場します（笑）。

作品全体を通すとクレアはかなりの出番を誇るはずなので、ゆっくり読んでくださればなーと思います。

その前にこんな作品を読んでくれている方が居るのかですが……。

さて、ここで今回出てきた敵キャラクターや、レディエンス側の人物についてちょこつと解説します。

第三部で登場した「悲鳴のアルト」「壊乱のアスタロト」「サンジェルマン・ロジェ」は、私の唯一無二の親友ともいうべき相方 R - E 先生のキャラクターを拝借しております。ちなみに、レディエンスの設定もほぼすべてを R - E 先生から拝借しております。

さらに第三部で新たに主人公の座に就いた（笑）キアも、R-E先生とわたしとの共同のキャラクターです。わたしの子でもあり、R-E先生の子でもあり。ふたり分の愛情がたつぷり注がれた、かわいい息子です。

元々はこのDouble自体のお話も、R-E先生と一緒に作っていた自作ゲームが元になっているのです。

最初から通して名前だけ出てきた「ルシオン」も、R-E先生のキャラクターです。実は、ルシオンとル力は最初まったく関連のないキャラだったのですが……

容姿や衣装センスがあまりにも似ていて、かつ両方の設定が国王だったなんて言う偶然に、感動を通り越した何かを感じて今の設定になりました。

ちなみに性格は真逆です。ルシオンさんに噛まれないようにご注意ください。いえ、噛みませんが。

DoubleをR-E先生でなく自分が執筆しているのは、わた^{クライスト}しの設定が典型的な「光属性」であり、R-E先生の設定が「闇属性」だったからです。ゲームも基本的に、クライストのほうに主人公たちが寄っているのです。

かといって、クライスト側にもR-E先生のキャラは複数所属する事になったりします。それはまた、近いうちにお話の中で触れるかと思われます。

長々と書いてしまいましたが、こんなところまでお読みくださり本当にありがとうございます。

ではでは、第四部もぜひお付き合いくだされば嬉しい限りです。

R
e
l
i
a
h

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3661h/>

Double.第三部

2010年10月12日03時15分発行